



1 はじめに

平成 27 年 4 月に実施された「平成 27 年度全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要についてお知らせします。結果については、平成 19 年度から、市全体の平均正答率等、数値を全国の数値と比較する形で公表しております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないよう十分配慮して取り扱う必要があります。従って、本内容をご活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされますようお願いいたします。



2 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の実施日

平成 27 年 4 月 21 日（火）

(3) 調査の対象

小学校第 6 学年 中学校第 3 学年

(4) 調査の内容

① 教科に関する調査

- ・国語 A、算数・数学 A（主として「知識」に関する問題）
- ・国語 B、算数・数学 B（主として「活用」に関する問題）
- ・理科（主として「知識」に関する問題と「活用」に関する問題）

② 質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

(5) 調査の方式

- | | | |
|------------------|---------|----------|
| ・ 平成 19 年度～21 年度 | 全児童生徒調査 | 国語、算数・数学 |
| ・ 平成 22 年度 | 抽出調査 | 国語、算数・数学 |

※ 平成 23 年度は東日本大震災のため予定していた抽出調査を中止

- | | | |
|------------------|---------|-------------|
| ・ 平成 24 年度 | 抽出調査 | 国語、算数・数学、理科 |
| ・ 平成 25 年度、26 年度 | 全児童生徒調査 | 国語、算数・数学 |
| ・ 平成 27 年度 | 全児童生徒調査 | 国語、算数・数学、理科 |

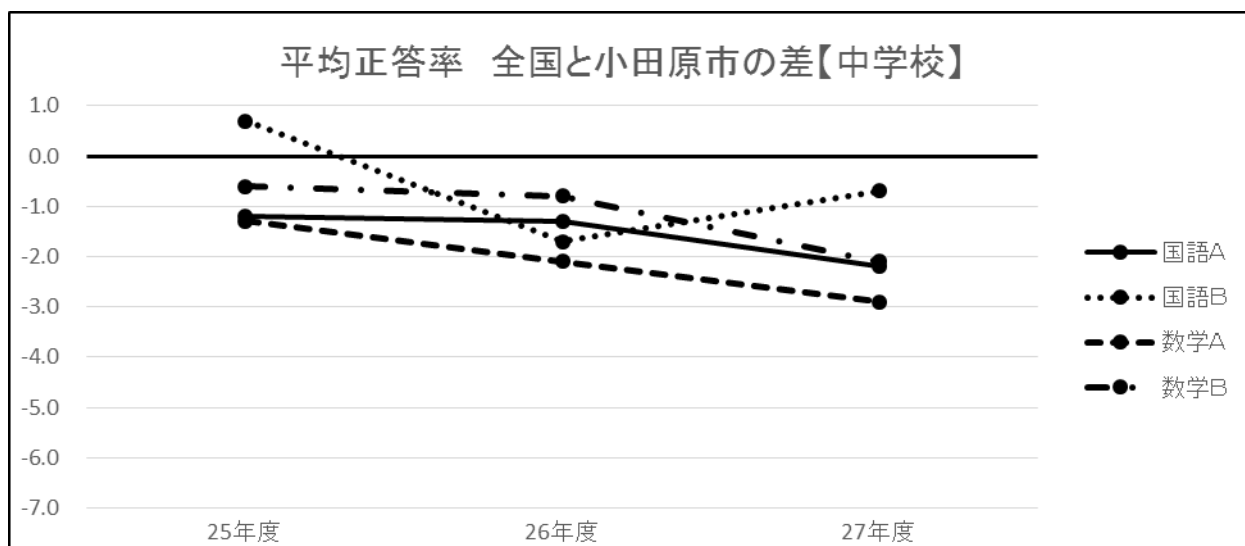
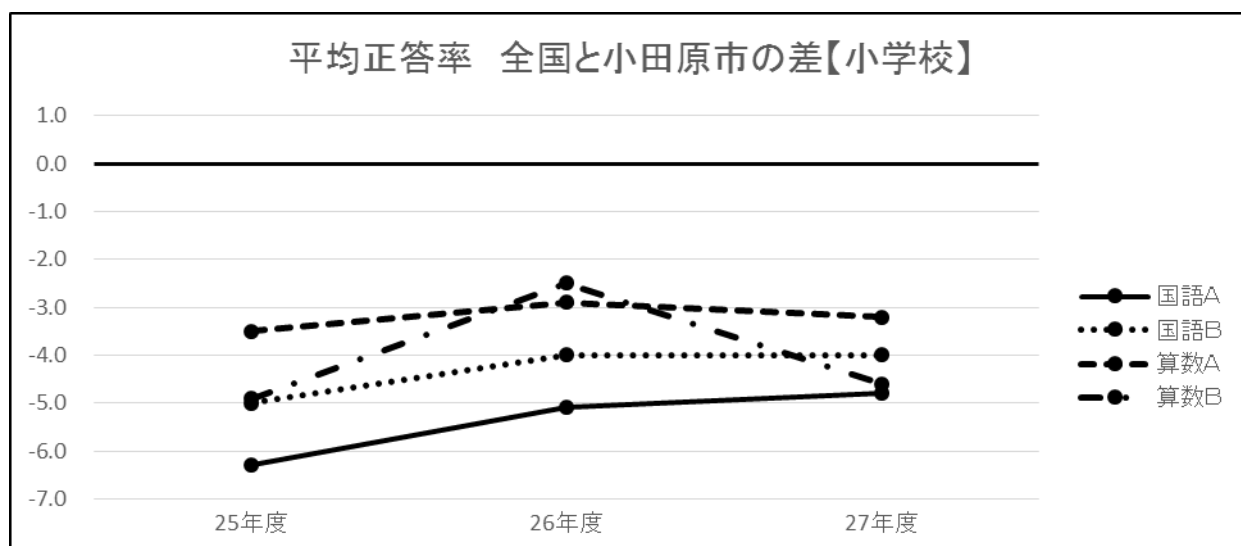


3 教科に関する調査について

【平成 27 年度 各教科の平均正答率一覧】

	教 科	小田原市	神奈川県	全 国	全国との差
小 学 校	国語 A	65.2	67.9	70.0	－4.8
	国語 B	61.4	64.3	65.4	－4.0
	算数 A	72.0	74.0	75.2	－3.2
	算数 B	40.4	44.8	45.0	－4.6
	理 科	57.8	60.4	60.8	－3.0
中 学 校	国語 A	73.6	76.0	75.8	－2.2
	国語 B	65.1	66.5	65.8	－0.7
	数学 A	61.5	65.0	64.4	－2.9
	数学 B	39.5	43.3	41.6	－2.1
	理 科	50.7	52.8	53.0	－2.3

【過去 3 年間の全国平均との比較グラフ】



＜文部科学省では平均正答率が±5%の範囲内は「全国同程度」と判断している。＞

（出典：文部科学省 国立教育施策研究所 平成27年度全国学力・学習状況調査 報告書 平成27年8月）

- ・小田原市は、小中学校とも全ての教科において、全国平均正答率を下回っているが、全て－5%以内にあり、「全国同程度」の学力と判断できる。
- ・小中学校とも、全ての教科が－5%以内となるのは、全児童生徒を対象とした平成25年度以降では初めてである。
- ・小学校は、中学校と比べ全国平均との差が大きい、算数B以外は横ばい又は差が減少している。
- ・中学校は、国語B以外は差が広がっているが、小学校と比べ全国平均との差は小さい。
- ・本調査の結果は、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面ではあるが、校内研究や教科指導に関する研修の成果を表す客観的な指標のひとつでもあり、小中学校ともに「全国同程度」ではなく、全国平均を目標とし学力向上を図る。

【小学校国語】

（１）小田原市の平均正答率と傾向

＜平均正答率＞

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	全 児 童 生 徒	小学校国語 A	80.6	81.7		－1.1
		小学校国語 B	60.0	62.0		－2.0
20		小学校国語 A	62.4	65.4		－3.0
		小学校国語 B	47.4	50.5		－3.1
21		小学校国語 A	66.8	69.9		－3.1
		小学校国語 B	48.3	50.5		－2.2
22	抽 出	小学校国語 A	82.2	83.3	83.2～83.5	－1.1
		小学校国語 B	77.9	77.8	77.7～78.0	＋0.1
24		小学校国語 A	81.2	81.6	81.4～81.7	－0.4
		小学校国語 B	56.7	55.6	55.4～55.8	＋1.1
25	全 児 童 生 徒	小学校国語 A	56.4	62.7		－6.3
		小学校国語 B	44.4	49.4		－5.0
26		小学校国語 A	67.8	72.9		－5.1
		小学校国語 B	51.5	55.5		－4.0
27		小学校国語 A	65.2	70.0		－4.8
		小学校国語 B	61.4	65.4		－4.0

※平均正答率の95%信頼区間…平成22・24年度は抽出調査であり、全児童生徒対象の調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が95%であるもの。

＜全体の傾向＞

A問題・B問題ともに、全国と比べて低い。A問題の「書くこと」は全国の前正答率とほぼ同

じだが、B問題の「書くこと」は課題が見られる。また、「読むこと」については、A問題・B問題ともに全国の正答率を下回っている。

◎…+5%以上 ○…0%～+5%未満 △…0%～-5%未満 ▲…-5%以下

(全国平均正答率比)

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項 *
小学校国語 A	○	○	▲	▲
小学校国語 B		△	△	

* 言語事項…伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

(2) 主な出題から《小学校国語 A》

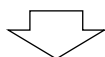
読むこと

6 登場人物の相互関係を捉える

【趣旨】登場人物の相互関係を捉えることができるかどうかをみる

小田原市正答率 60.1% 全国正答率 67.5% (無解答率 小田原 3.7% 全国 2.6%)

登場人物3人のうち、主人公の心情はとらえられているが、他の登場人物の心情をとらえられていないものが多かった。地の文や会話描写から登場人物の心情をとらえ、前後の文脈から登場人物の相互関係をとらえることができなかったと考える。



改善のポイント

登場人物の相互関係を構造的にとらえる

物語を読む際は、登場人物の相互関係を構造的にとらえることが重要である。そのためには、物語中の様々な描写から、一人一人の登場人物の行動や性格、場面の展開に即して変化し、心情をとらえることができるように指導することが大切である。また、登場人物の相互関係からそれぞれの人物像や役割を押さえることによって、内面にある深い心情も合わせて想像するなど、全体を構造的にとらえることができるように指導することも大切である。

具体的には、物語の登場人物を人間関係図に表すことが考えられる。その際、登場人物を矢印などでつなぎ、行動や会話といった描写などを手掛かりにして、一人一人の登場人物の行動や性格、心情の変化、相手への思いや考えなどを書き込んでいく方法などが考えられる。

言語事項

1二 漢字を読んだり書いたりする

【趣旨】学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく読んだり書いたりすることができるかどうかをみる。

(シャワーをあびる)

小田原市正答率 45.0% 全国正答率 58.4% (無解答率 小田原 26.7% 全国 17.2%)

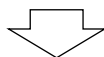
(鳥のすを観察する)

小田原市正答率 67.6% 全国正答率 76.5% (無解答率 小田原 10.8% 全国 5.7%)

(びょういんに行く)

小田原市正答率 64.3% 全国正答率 74.9% (無解答率 小田原 9.5% 全国 4.7%)

漢字を読むことは全国の正答率とほぼ同じだが、漢字を正しく書くことには課題がみられた。また、無解答率が高く、何も書けない児童が多いことがわかった。



改善のポイント

漢字を読んだり書いたりする機会を意図的・計画的に設定する

当該学年の配当漢字を指導するに当たっては、日常的に文や文章の中で適切に使うことができるようにすることが重要である。習得した漢字を読んだり書いたりする機会を可能な限り多く、意図的・計画的に設定することによって、児童が漢字をより身近なものとしてとらえることができるようにする。

(3) 主な出題から《小学校国語B》

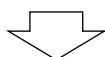
書くこと

2三 目的に応じ、文章と図とを関係付けて読む

【趣旨】文章と図とを関係付けて、自分の考えを書くことができるかどうかをみる。

小田原市正答率 36.6% 全国正答率 41.6% (無解答率 小田原 12.3% 全国 8.7%)

正答の条件として、「①リコーダー、小だいこ、木きんという3つの言葉を使う」「②木きんの決め方については、文章の中で説明している、決めるときに大切なことを取り上げる」「③80字以上、100字以内で書いている」の3つが示されているが、本年度も引き続き、条件に合わせて適切に書くことに課題がある。さらに、無解答率の高さも問題である。



改善のポイント

文章と図表やグラフなどとを関係付けて、自分の考えをまとめる。

児童が文章と図表やグラフなどとを関係付けて、自分の考えをまとめるためには、図表やグラフなどを読み取るとともに、これらを関係付けて読むことについて指導することが必要である。具体的には、図表やグラフなどが添えられた文章を提示し、それらを関係付けて読んだり、自分の考えを書いたりする指導を意図的に行うことが考えられる。その際、図表やグラフの内容が文章のどこに取り上げられているのか、どの程度詳しく、あるいは簡潔に説明されているのかなど、文章と図表やグラフなどとの関係やその効果をとらえることができるように指導することが大切である。

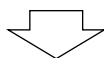
読むこと

3一 相手や目的に応じて読み聞かせをする

【趣旨】場面の移り変わりに注意し、登場人物の行動や気持ちの変化について想像しながら音読することができるかどうかをみる。

小田原市正答率 55.0% 全国正答率 60.4% (無解答率 小田原 14.8% 全国 9.7%)

本設問では、登場人物の行動を基にして、場面の移り変わりをとらえることに課題がみられた。これは、主人公の行動描写や、設問にある「小川さん」「高木さん」の発言に着目することができなかったためと考えられる。また、無解答率が全国と比べて高い結果となった。



改善のポイント

登場人物の行動や会話、情景を基にして場面の移り変わりをとらえる。

場面の移り変わりは、登場人物の行動や会話、情景などを基にとらえることが大切である。そのためには、各場面の様子を、登場人物の行動や会話、情景などの叙述を根拠にしながら、的確にとらえるとともに、場面と場面とを関係付けて読む指導が必要である。

具体的には、物語の展開に即して、「いつ」、「どこで」、「だれが」、「何をして」、「どう思ったか」などを中心に物語のあらすじをまとめることで、場面の移り変わりをとらえることができるように指導することが考えられる。

【小学校算数】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

<平均正答率>

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	全 児 童 生 徒	小学校算数 A	80.5	82.1		－1.6
		小学校算数 B	61.4	63.6		－2.2
20		小学校算数 A	71.6	72.2		－0.6
		小学校算数 B	50.0	51.6		－1.6
21		小学校算数 A	76.9	78.7		－1.8
		小学校算数 B	54.1	54.8		－0.7
22	抽 出	小学校算数 A	73.3	74.2	74.0～74.4	－0.9
		小学校算数 B	48.1	49.3	49.1～49.5	－1.2
24		小学校算数 A	72.0	73.3	73.1～73.5	－1.3
		小学校算数 B	60.7	58.9	58.7～59.1	＋1.8
25	全 児 童 生 徒	小学校算数 A	73.7	77.2		－3.5
		小学校算数 B	53.5	58.4		－4.9
26		小学校算数 A	75.2	78.1		－2.9
		小学校算数 B	55.7	58.2		－2.5
27		小学校算数 A	72.0	75.2		－3.2
		小学校算数 B	40.4	45.0		－4.6

※平均正答率の 95%信頼区間…平成 22・24 年度は抽出調査であり、全児童生徒対象の調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が 95%であるもの。

<全体の傾向>

A問題・B問題ともに、全国平均よりも低い数値となっている。特にB問題については差が大きく(4.6%)、さらに、全ての設問において、無解答率が全国平均よりも高い数値となっている。

◎…+5%以上 ○…0%～+5%未満 △…0%～-5%未満 ▲…-5%以下
(全国平均正答率比)

	数と計算	量と測定	図形	数量関係
小学校算数A	△	△	△	△
小学校算数B	△	△	△	△

(2) 主な出題から《小学校算数A》

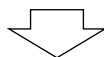
数と計算

2(4) 四則計算

【趣旨】除数が整数である場合の分数の除法の計算をすることができるかどうかをみる。

小田原市正答率 76.3% 全国正答率 84.2% (無解答率 小田原 9.5% 全国 4.1%)

この設問については、無解答率が1割近くであることから、分数を整数でわる計算の仕方が理解できていない児童が多数存在することが考えられる。



改善のポイント

既習内容を基に、計算の仕方を考え、確実に理解できるようにすることが大切である。そのためには、分数の乗法の計算の仕方、大きさの等しい分数、割り算の計算のきまりなどの学習を、確実に定着させておく必要がある。指導に当たっては、分数の計算の意味を基にしながら、分数の計算の仕方について話し合う活動を行うなどが考えられる。

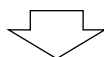
図形

5(2) 円と二等辺三角形

【趣旨】円の性質から三角形の等辺を捉え、二等辺三角形の性質から底角の大きさを求めることができるかどうかをみる。

小田原市正答率 56.7% 全国正答率 64.5% (無解答率 小田原 4.2% 全国 2.4%)

70°と誤答しているものが19.1%(全国13.3%)である。二等辺三角形の性質から底角の大きさを求めることに課題がある。



改善のポイント

図形の問題に関して、作図や他の図形と比較する活動等を通して、図形の意味を理解したり、性質を見つけたりすることは重要である。指導にあたっては、角の大きさや辺の長さの求め方が適切である根拠を示すことが大切である。一つの円の半径はどれも等しいことを基に示された三角形は二等辺三角形であると考えたり、二等辺三角形では二つの角が等しいことを基に他の角を考えたりするなど、なぜその求め方で角の大きさを求めることができたのか根拠を明確にしていく必要がある。

(3) 主な出題から《小学校算数B》

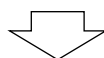
数と計算

4 (1) 見積りの仕方と結果の判断 (キャップ集め)

【趣旨】四捨五入して千の位までのおよその数にして計算することができるかどうかをみる。

小田原市正答率 43.2% 全国正答率 52.6% (無解答率 小田原 3.5% 全国 2.4%)

位に正しく着目し、四捨五入して千の位までのおよその数にして計算することに課題がある。四つの数を全て切り上げたり、全て切り捨てたりしている誤答が見られ、「千の位までのおよその数にする」ということは捉えることができているが、問題場面に沿った概数の処理ができていないと考えられる。



改善のポイント

概数に関する学習では、目的に応じて概算し的確に処理できるようにすることが必要である。そのためには、見積もりの目的と関連付けて、「四捨五入」、「切り上げ」、「切り捨て」の用語の意味や処理の仕方についての理解を深めることが大切である。指導に当たっては、形式的な処理に終わらせることなく、日常生活での経験や興味・関心と関連付けて、概算の用語や処理の仕方を取り扱うことが大切である。

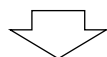
図形

3 (2) 図形の性質に基づいた日常事象の解釈と説明 (ライン引き)

【趣旨】正三角形の性質や合同な三角形の性質を基に、㊦の角が 30° になる理由を言葉と数、記号を用いて記述できるかどうかをみる。

小田原市正答率 40.2% 全国正答率 49.1% (無解答率 小田原 27.0% 全国 18.9%)

誤答として、正三角形の一つの角の大きさが 60° であること、合同な図形の対応する角の大きさが等しいことを記述せずに、㊦の角の半分の大きさになることを記述しているものや、正三角形の性質として辺の長さが等しいことを捉えることはできているが、角の大きさに着目できていないと考えられるものがある。



改善のポイント

指導に当たっては、説明の根拠を明確にさせるとともに、話し手の児童の説明が筋道の立った説明になっているのかどうかを判断し、必要によって話し手の児童に言い直すように促す。また、聞き手の児童には、筋道の立った説明になっているかを意識して話を聞くように促すことが大切である。

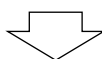
量と測定・図形

5（2） 図形の観察と根拠の説明（面積の2等分）

【趣旨】条件を変更した場面に面積を2等分する考えを適用して、示された部分の面積を求めることができるかどうかをみる。

小田原市正答率 39.5% 全国正答率 47.8%（無解答率 小田原 26.5% 全国 17.3%）

小田原市の児童の4分の1以上が無解答であり、大きな課題である。



改善のポイント

児童が場面や数値などの条件を変えて、発展的に考察していくことができるように教材を工夫することが大切である。指導に当たっては、学習したことをさらに発展させて新たな問題を設定し、場面や数値などの条件の異同を確認したり、問題の構造を比較したりするなどして、学習した考えをどのように活用していくかを確認する場を設けることが大切である。

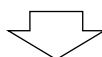
数量関係

2（3） 場面の読み取りと処理・判断（おつかい）

【趣旨】示された割り引き後の値段の求め方の中から誤りを指摘し、正しい求め方と答えを言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる。

小田原市正答率 43.2% 全国正答率 51.0%（無解答率 小田原 19.4% 全国 12.8%）

自分の考えを振り返り、批判的に考察する力が必要な問題であり、既習の知識を活用しながら課題を逆思想的に捉えていくことができるかが課題となっている。



改善のポイント

算数の学習においては、考えの妥当性を評価し修正することは、既習の考えに対する理解をより確かなものにしたり、発展的な考えを導いたりする上で大切である。指導に当たっては、考えが誤りやすい場面を取り上げた際に、自分の考えを振り返るように促すなど、考えを批判的に考察する機会を設けるとともに、基礎基本の確実な定着が求められる。

【小学校理科】

（1）小田原市の平均正答率と傾向

＜平均正答率＞

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の95%信頼区間	全国比
24	抽出	小学校理科	61.9	60.9	60.8～61.1	+1.0
27	全児童生徒	小学校理科	57.8	60.8		-3.0

※平均正答率の95%信頼区間…平成24年度は抽出調査であり、全児童生徒対象の調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が95%であるもの。

＜全体の傾向＞

「地球」に関する領域以外は、どの領域も3ポイント前後、全国平均を下回っている。

◎…+5%以上 ○…0%～+5%未満 △…0%～-5%未満 ▲…-5%以下
(全国平均正答率比)

	物質	エネルギー	生命	地球
小学校理科	△	△	△	△

(2) 主な出題から《小学校理科》

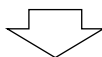
物質

3 (3) 粒子に関する問題 水の温まり方

【趣旨】水の温まり方を考察するために、実験結果を基に自分の考えを改善できるかどうかをみる。

小田原市正答率 46.5% 全国正答率 51.7% (無解答率 小田原 1.3% 全国 1.1%)

本設問は、主として「活用」に関する問題である。水の温まり方に対する自分の予想について、実験から得られた結果と照らし合わせながら考えを改善し、妥当な考えを選択する問題である。実験結果を基に考えを適切に修正できなかった例としては、熱せられた部分から順に温まっていくという金属の温まり方と同じように考えた誤答が目立った。



改善のポイント

実験結果を基により妥当な考えに改善するには、実験前の自分の予想と実験で得られた結果とを照らし合わせ、自分の予想が確認されたのか検討することが大切である。

指導に当たっては、本設問のように温度計の温度が高くなる順番を実験結果の表から読み取り、予想と照らし合わせる活動を行うことが考えられる。予想が実験結果と一致しない場合は、予想の振り返り、見直し、再検討を行ったり、他者の予想を振り返ったりすることで、結果から適切に考察できるようにすることが大切である。

エネルギー

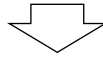
1 (2) エネルギーに関する問題 振り子の運動の規則性

【趣旨】振り子の運動の規則性を振り子時計の調整の仕方に適用できるかどうかをみる。

小田原市正答率 52.1% 全国正答率 61.2% (無解答率 小田原 0.9% 全国 0.7%)

本設問は、主として「活用」に関する問題である。振り子の運動の規則性を的確に捉え、これを振り子時計の調整に適用して考察することが必要である。振り子時計が遅れないように、振り子の1往復する時間を短くするため、おもりの位置を支点に近づける必要がある。

誤答としては、振り子の振れ幅を短くするものを選択しているものが目立った。振り子が1往復する時間が、振れ幅に関係していると捉えていることが考えられる。



改善のポイント

学習を通して獲得した知識を他の場面で適用するためには、獲得した知識と実際の自然や日常生活での現象とを関係付けて捉えられるようにすることが大切である。

本設問では、振り子の長さを短くすることは、振り子時計のおもりを軸に沿って上げることと同じであることを捉える必要がある。振り子について学習した知識を身の回りの現象に当てはめて考えたことを言葉や文章で整理したり、振り子時計のおもりの位置や軸が学習で用いた実験用振り子のどの部分に当たるのかを確認したりする学習活動が考えられる。

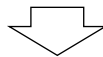
生命

2 (1) 生命に関する問題 メダカの雌雄を見分ける

【趣旨】メダカの雌雄を見分ける方法を理解しているかどうかをみる。

小田原市正答率 68.2% 全国正答率 78.0% (無解答率 小田原 0.8% 全国 0.3%)

本設問は、主として「知識」に関する問題である。全国に比べ約 10 ポイント低い正答率となっており、正しい理解ができていない。誤答に「しりびれ」と「おびれ」を選択したものが多く、「せびれ」と「おびれ」を混同しているのか、あるいは、単に大きな「ひれ」を選んでいるなどが予想される。



改善のポイント

雌雄を見分ける方法を理解するためには、メダカを育て観察することを通して、ひれなどの形状の違う魚の存在に気づき、形状の違いにより雌雄を見分けられることを捉えることが大切である。

知識の定着については、具体的な活動を通じた学習による知識の定着を目指すべきで、単に用語を覚えさせるような指導では意味がない。顕微鏡の各部の名称を覚える際にも、顕微鏡を使った観察を通し、各部が何を調節するための部分で、どう調節するとよいのか正しい操作ができるなど、「活用」につながる「知識」として捉えるべきである。

【中学校国語】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

＜平均正答率＞

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	全 児 童 生 徒	中学校国語 A	79.7	81.6		－1.9
		中学校国語 B	70.0	72.0		－2.0
20		中学校国語 A	72.1	73.6		－1.5
		中学校国語 B	58.9	60.8		－1.9
21		中学校国語 A	75.3	77.0		－1.7
		中学校国語 B	72.5	74.5		－2.0
22	抽 出	中学校国語 A	74.8	75.1	75.0～75.2	－0.3
		中学校国語 B	63.0	65.3	65.1～65.5	－2.3
24		中学校国語 A	74.5	75.1	75.0～75.2	－0.6
		中学校国語 B	62.9	63.3	63.2～63.4	－0.4
25	全 児 童 生 徒	中学校国語 A	75.2	76.4		－1.2
		中学校国語 B	68.1	67.4		＋0.7
26		中学校国語 A	78.1	79.4		－1.3
		中学校国語 B	49.3	51.0		－1.7
27		中学校国語 A	73.6	75.8		－2.2
		中学校国語 B	65.1	65.8		－0.7

※平均正答率の 95%信頼区間…平成 22・24 年度は抽出調査であり、全児童生徒対象の調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が 95%であるもの。

＜全体の傾向＞

A 問題は全国と比較してやや低い、B 問題は全国とほぼ同程度である。A 問題は、語句の理解や適切な使用について課題がみられる。B 問題については、「書くこと」の領域で昨年からの改善がみられるものの、引き続き記述式の問題における無解答率の高さは課題である。

◎…+5%以上 ○…0%～+5%未満 △…0%～-5%未満 ▲…-5%以下

(全国平均正答率比)

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項 *
中学校国語 A	△	△	△	△
中学校国語 B	△	○	△	

* 言語事項…伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

(2) 主な出題から《中学校国語 A》

言語事項

9三 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

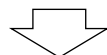
【趣旨】語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことができるかどうかをみる。

エ 「縁」の下の方持ち… 小田原市正答率 66.2% 全国正答率 70.8%

オ 「たなびく」雲の間から… 小田原市正答率 42.3% 全国正答率 49.0%

カ 新聞をよむ習「慣」… 小田原市正答率 83.3% 全国正答率 86.9%

改善のポイント



場面に即した「語句」や「語い」の使い方について指導を工夫する。

語句の意味について理解を深めるためには、語句の辞書的な意味を基にして、文脈に即して意味を捉えられるように指導することが大切である。特に、日常生活で使うことの少ない語句について指導をする際には、実際に使われている場面を取り上げてその意味を確認し、短文を作ったり、別の表現で言い換えたりする学習活動が有効である。また、誤った意味で使われやすい言葉や、使い分けが紛らわしい言葉を指導する際には、語句の意味や用法をより具体的な場面と合わせながら学習できるようにすることが大切である。さらに、読書指導と関連付けて取り上げることや日常的に行うスピーチや新聞記事紹介等の継続的な指導場面の中で、機会を捉えて指導することも効果的である。

(3) 主な出題から《中学校国語 B》

書くこと

3三 文学的な文章を読む「貉（むじな）」

【趣旨】文章の構成や展開などを踏まえ、根拠を明確にして自分の考えを書くことができるかどうかをみる。

小田原市正答率 32.1% 全国正答率 31.1%（無解答率 小田原 15.1% 全国 11.1%）

「…そして、それと同時に、屋台の火も消えた。」という最後の一文について、あった方がよいか、ない方がよいかを生徒自身が明確にし、自分の考えを 50 字以上 80 字以内といった 3 つの条件にあわせて書く設問となっている。問題文は、小泉八雲の怪談「貉（むじな）」を翻訳したものであるが、怪談話ということもあり、生徒にとって、興味をもって読み進めることができる内容である。

しかしながら、本設問については、正答率が全国平均よりは高いものの、32.1%であり、条件にあわせて自分の考えを文章化していくことに、引き続き課題があると考えられる。さらに、無解答率については、小田原 15.1%・全国 11.1%と、全国との比較からは未だ無解答率が高い状況にはあるが、年々その割合が低くなっていることから、「書く」ということを意識した指導や日常的な取組を引き続き行っていくことが必要である。



改善のポイント

文章の展開について、根拠を明確にして自分の考えをもつ。

文学的な文章は、文章の展開の工夫が面白さの要因の一つとなっていることがある。文章の展開について自分なりの考えをもつためには、作品の全体像を捉えた上で、場面の役割等を分析的に考える必要がある。例えば、この場面がなかったらどのように作品全体の印象が変わるかなどについて、根拠を示しながら書いたり、話し合ったりする学習活動が考えられる。その際、自分の考えを支える根拠が明確に示されているかどうかを検討することが大切である。

【中学校数学】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

＜平均正答率＞

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	全 児 童 生 徒	中学校数学 A	68.3	71.9		－3.6
中学校数学 B		58.2	60.6	－2.4		
20		中学校数学 A	61.8	63.1		－1.3
		中学校数学 B	47.9	49.2		－1.3
21		中学校数学 A	61.4	62.7		－1.3
		中学校数学 B	56.4	56.9		－0.5
22	抽 出	中学校数学 A	63.7	64.6	64.4～64.8	－0.9
中学校数学 B		42.5	43.3	43.1～43.5	－0.8	
24		中学校数学 A	61.1	62.1	62.0～62.3	－1.0
		中学校数学 B	50.4	49.3	49.2～49.5	＋1.1
25	全 児 童 生 徒	中学校数学 A	62.5	63.7		－1.3
中学校数学 B		40.9	41.5	－0.6		
26		中学校数学 A	65.3	67.4		－2.1
		中学校数学 B	59.0	59.8		－0.8
27		中学校数学 A	61.5	64.4		－2.9
		中学校数学 B	39.5	41.6		－2.1

※平均正答率の 95%信頼区間…平成 22・24 年度は抽出調査であり、全児童生徒対象の調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が 95%であるもの。

＜全体の傾向＞

A 問題・B 問題ともに、全国平均を若干下回っている。B 問題より A 問題のほうが、より全国平均を下回っており、基礎的、基本的な知識・技能の習得に課題が見られるという傾向がここ数年続いている。

◎…+5%以上 ○…0%～+5%未満 △…0%～-5%未満 ▲…-5%以下
(全国平均正答率比)

	数と式	図形	関数	資料の活用
中学校数学 A	△	△	△	△
中学校数学 B	△	△	△	△

(2) 主な出題から《中学校数学 A》

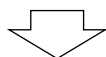
数と式

3 (3) 方程式の解き方とその利用

【趣旨】具体的な事象における数量の関係を捉え、連立二元一次方程式をつくることができるかどうかをみる。

小田原市正答率 35.9% 全国正答率 44.9% (無解答率 小田原 1.6% 全国 0.9%)

正答状況、誤答状況からみて、増減を式に表すイメージを持つことはできるが、具体的な事象における数量の関係を正確に捉え、連立二元一次方程式として表す方法を理解していない生徒が相当数いると考えられる。



改善のポイント

事柄や数量の関係を捉え、その関係を文字式に表すことができるようにするために、具体的な数や言葉を使った式を利用したり、数量を図に表したりして関係を捉え、文字式に表す活動を重視することが大切である。

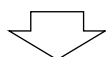
関数

10 (1) 反比例のグラフ・比例のグラフ上の点・変域

【趣旨】反比例のグラフが x 軸、y 軸に限りなく近づく 2 つのなめらかな曲線であることを理解しているかどうかをみる。

小田原市正答率 53.2% 全国正答率 61.7% (無解答率 小田原 1.9% 全国 1.2%)

反比例のグラフは、x 軸、y 軸に近づくといずれ軸と交わると捉えた誤答が一番多く見られた。選択式問題のため無解答率は低いが、その反面、反比例の特徴を正しく理解した上での正答率は、53.2%より低いと思われる。



改善のポイント

反比例のグラフは、x 軸、y 軸のそれぞれに限りなく近づくが、交わらない 2 つのなめらかな曲線となることを理解できるよう指導することが大切である。例えば、x の値を細かくとってグラフの通る点を調べる活動を行い、グラフがなめらかな曲線になることを確認するとともに、x の値を大きくしても y の値が 0 とならないことや、x = 0 のとき y の値は求められないことから、グラフは x 軸と y 軸のそれぞれに限りなく近づくが交わらないことを丁寧に確認し、反比例の特徴を理解できるよう指導する。

(3) 主な出題から《中学校数学B》

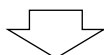
資料の活用

5 (1) 情報の適切な選択と判断 (落とし物調査)

【趣旨】与えられた情報から必要な情報を選択し、的確に処理することができるかどうかをみる。

小田原市正答率 31.8% 全国正答率 39.1% (無解答率 小田原 33.0% 全国 26.8%)

本市では、正答よりも、無解答のほうが多い。誤答の内容からも、もとにする量と比べる量の区別ができていない生徒がいると考えられ、与えられた情報から必要な情報を選択し、的確に処理することに課題があると考えられる。



改善のポイント

実生活の場面で、事象を目的に応じて数値化して判断する場面を設定し、与えられた情報から必要な情報を選択し、的確に処理することができるように指導することが大切である。

本設問を使って授業を行う際には、1回目と2回目の落とし物の合計が異なることを確認し、割合を用いることで、1回目と2回目の落とし物の傾向を捉えることができるように指導することが大切である。その際、Aに対するBの割合は $B \div A$ で求められるが、誤答でも多かったように、 $A \div B$ で求める生徒がいると考えられるので、Aを1としたときのBの値がAに対するBの割合であるということを、数直線や比例式を用いて丁寧に確認する場面を設定することが大切である。

【中学校理科】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

＜平均正答率＞

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の95%信頼区間	全国比
24	抽出	中学校理科	49.3	51.0	50.9～51.1	-1.7
27	全児童生徒	中学校理科	50.7	53.0		-2.3

※平均正答率の95%信頼区間…平成24年度は抽出調査であり、全児童生徒対象の調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が95%であるもの。

＜全体の傾向＞

平均正答率はやや下回っているものの、全国とほぼ同程度であると考えられる。

◎…+5%以上 ○…0%～+5%未満 △…0%～-5%未満 ▲…-5%以下

(全国平均正答率比)

	物理的領域	化学的領域	生物的領域	地学的領域
中学校理科	△	▲	△	△

(2) 主な出題から《中学校理科》

化学的領域

1 (1) 濃度入浴剤とベーキングパウダーを科学的に探求する (化学的領域)

【趣旨】 特定の質量パーセント濃度の水溶液の溶質と水のそれぞれの質量を求めることができるかどうかをみる。

小田原市正答率 38.9% 全国正答率 45.0% (無解答率 小田原市 21.7% 全国 17.6%)

本設問は、主として「知識」に関する問題である。質量パーセント濃度の「溶液」「溶質」「溶媒」の質量の関係を正しく理解し、式で表すことが必要な問題である。「塩化ナトリウム 5 g、水 100 g」という解答については、「質量の保存」に関する理解が十分でないと言える。無解答率も高く、今後の改善が望まれる。



改善のポイント

水溶液の濃度を量的に扱うことは、化学変化における粒子の基本的な見方や概念を形成する上で大切である。実際に食塩のおもさを測り、食塩水をつくる体験を通して、濃度と溶質、溶媒、溶液の量の関係を捉えさせるようにする。また、算数・数学で学習した線分図を活用し、視覚的に捉えやすくする工夫なども考えられる。

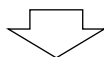
化学的領域

1 (3) 濃度入浴剤とベーキングパウダーを科学的に探求する (化学的領域)

【趣旨】 発生する二酸化炭素の体積を量る方法について話し合っている場面において、気体の特性とそれに応じた捕集法があることの知識を活用して、水上置換法では二酸化炭素の体積を正確に量れない理由を説明できるかどうかをみる。

小田原市正答率 39.1% 全国正答率 53.0% (無解答率 小田原市 27.0% 全国 18.8%)

本設問は、主として「活用」に関する問題である。二酸化炭素が水に溶けるという特性と水上置換による捕集法の知識を活用することが必要な問題である。「二酸化炭素は空気より重いから」と解答した生徒は、二酸化炭素に関する知識の一部しか理解しておらず、水に溶けるという知識を活用できていない。27%の生徒が無解答であり、指導の充実が求められる。



改善のポイント

気体の特性に応じた捕集法があることを、実験を通して理解することが大切である。指導に当たっては、実際に水に溶けやすい気体を水上置換法で捕集してみて、視覚的に適していないことを捉えさせることが考えられる。



4 児童生徒質問紙調査について

○…概ね良好な傾向が見られる項目 ■…課題の見られる項目

(数値は、主に「当てはまる」「どちらかと言えばあてはまる」等肯定的な回答の割合の合計)

小学校

(1) 学習に対する関心・意欲・態度等

○授業の中で分からないことがあったら、①「その場で先生に尋ねる」と回答した児童の割合が全国平均よりも 4.9 ポイント高い。

(①小田原市 21.0% 全国 16.1%)

○多くの児童が①「国語・算数の勉強は大切である」、②「国語・算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」と回答している。

(①国語：小田原市 93.0% 全国 92.0% 算数：小田原市 93.2% 全国 93.1%)

(②国語：小田原市 88.7% 全国 88.6% 算数：小田原市 90.8% 全国 90.3%)

○「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」という児童の割合が高い。

(小田原市 67.7% 全国 65.2%)

○「算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考える」と回答した児童の割合が全国平均よりやや低いが、昨年度よりも 5.3 ポイント増えた。

(小田原市 78.7% 全国 79.6%)

○①「読書は好きである」と回答した児童の割合が昨年度よりも 5.1 ポイント増え、全国平均よりも高くなった。②「1 日あたり 30 分以上読書している」児童の割合も昨年度より若干増加した。

(①小田原市 73.1% 全国 72.8% ②小田原市 37.1% 全国 37.7%)

■①「国語の勉強が好きである」、②「算数の勉強が好きである」と回答した児童の割合が全国平均よりもやや低い。

(①小田原市 58.6% 全国 61.1% ②小田原市 66.0% 全国 66.6%)

■解答を文章で書く問題について、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童の割合が国語・算数ともに全国平均より約 5 ポイント低い。

(国語：小田原市 72.2% 全国 77.7% 算数：小田原市 66.9% 全国 73.3%)

(2) 学習状況

○ほとんどの児童が「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる」と回答している。

(小田原市 94.2% 全国 92.9%)

■「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意」と回答した割合は、小田原市の児童の約半数である。

(小田原市 50.5% 全国 51.2%)

(3) 学習時間等

○昨年度と同様、「家で学校の宿題をしている」児童の割合は高い。

(小田原市 96.1% 全国 96.8%)

○家で、学校の授業の予習をしている児童の割合が全国平均より 3.9 ポイント高い。

(小田原市 47.3% 全国 43.4%)

○「家で自分で計画を立てて勉強をしている」児童の割合が、昨年度よりも 2.8 ポイント増え、全国平均に近づいた。

(小田原市 62.5% 全国 62.8%)

■「普段、学校の授業時間以外に 1 日当たり 1 時間以上勉強する」児童の割合は昨年度より 2.5 ポイント増えたが、全国平均と比較すると約 4 ポイント低い。

(小田原市 58.9% 全国 62.7%)

■「学校が休みの日に、1 日当たり 1 時間以上勉強する」児童の割合は、全国平均と比較すると 5.1 ポイント低い。

(小田原市 51.6% 全国 56.7%)

(4) 学校生活等

○「学校に行くのは楽しいと思っている」児童の割合は高い。

(小田原市 88.3% 全国 87.0%)

(5) 基本的生活習慣

○①「朝食を毎日食べている」児童の割合は昨年度より増加し、全国平均を上回った。②「あまり食べていない、全く食べていない」児童の割合も低下した。

(①小田原市 95.8% 全国 95.6% ②小田原市 4.1% 全国 4.3%)

■1 日に 2 時間以上①「テレビやビデオ・DVD を見たり、聞いたりする」児童の割合は全国平均よりも 6.8 ポイント高く、②「テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をする」児童の割合も全国平均よりも 5 ポイント高い。

(①小田原市 66.0% 全国 59.2% ②小田原市 35.2% 全国 30.2%)

■「普段（月～金曜日）、1 日あたり 1 時間以上、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする」児童の割合が全国平均よりも 1.2 ポイント高い。

(小田原市 18.1% 全国 16.9%)

(6) 家庭でのコミュニケーション等

○「家の人と学校での出来事について話をする」児童の割合が高い。

(小田原市 81.0% 全国 79.5%)

(7) 地域との関わり

■「今住んでいる地域の行事に参加している」児童の割合は昨年度より増加しているが、全国平均と比較して 8.8 ポイント低い。(小田原市 58.1% 全国 66.9%)

(8) 社会に対する興味・関心

- ①「地域や社会で起こっている問題や出来事などに関心がある」児童の割合や、②「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」児童の割合は昨年度より 6 ポイント近く増加し、全国平均に並んだ。

(①小田原市 63.9% 全国 63.9% ②小田原市 44.8% 全国 44.8%)

- ①「テレビやインターネットのニュースを見る」児童の割合は高いが、②「新聞を読んでいる」児童の割合は全国平均よりも低い。

(①小田原市 85.9% 全国 84.3% ②小田原市 18.7% 全国 23.7%)

(9) 将来に関する意識

- 「将来の夢や目標を持っている」児童の割合が高い。

(小田原市 85.1% 全国 86.5%)

(10) 自尊意識

- 「自分にはよいところがある」と回答する児童の割合が高い傾向にある。

(小田原市 76.9% 全国 76.4%)

- 「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある」と回答する児童の割合は高い。

(小田原市 94.8% 全国 94.5%)

- 「難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦する」と回答する児童の割合は、全国平均よりもわずかに低い、昨年度より 3.8 ポイント増加した。

(小田原市 74.8% 全国 76.4%)

(11) 規範意識

- 「学校のきまりを守っている」児童の割合は高い。

(①小田原市 90.9% 全国 91.1%)

- ①「人の気持ちが分かる人間になりたい」、②「いじめは、どんな理由があってもいけない」、③「人の役に立つ人間になりたい」と思っている児童の割合は高い。①～③ともに、昨年度の数値とほぼ変化はない。

(①小田原市 94.6% 全国 93.9% ②小田原市 96.3% 全国 96.2%

③小田原市 93.5% 全国 93.7%)

中学校

(1) 学習に対する関心・意欲・態度等

- ①「国語の勉強は大切である」と回答した生徒の割合は昨年度より 2 ポイント増加した。また、多くの生徒が、②「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」と考えている。

(①小田原市 90.3% 全国 89.9% ②小田原市 84.8% 全国 84.2%)

- 「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」と回答した生徒の割合は昨年度よりわずかに減少しているものの、全国平均より高い。

(小田原市 63.5% 全国 59.2%)

- 「国語の授業で文章を読む際、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる」と回答した生徒の割合は昨年度に比べて増加しており、全国平均と比較しても高い。

(小田原市 74.3% 全国 70.6%)

- ①「数学の勉強は大切だと思っている」生徒の割合、また、②「数学ができるようになりたいと思っている」生徒の割合は昨年度と同様に高い。

(①小田原市 80.4% 全国 82.6% ②小田原市 90.7% 全国 91.5%)

- ①「理科の勉強は大切だと思っている」生徒の割合、また、②「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」と回答した生徒の割合は、国語や数学の同質問項目の割合と比べると低い。

(①小田原市 67.5% 全国 69.3% ②小田原市 55.5% 全国 54.3%)

(2) 学習状況

- 「生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と感じている生徒の割合は昨年度と比べて若干低いが、全国平均よりは高い。

(小田原市 65.0% 全国 62.9%)

(3) 学習時間等

- 「普段、学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上勉強する」生徒の割合は、昨年度と比べ2ポイント増加した。

(小田原市 70.2% 全国 69.0%)

- 「家で自分で計画を立てて勉強している」生徒の割合は低い。

(小田原市 44.8% 全国 48.8%)

- 「読書は好きである」と比較的多くの生徒が回答しているが、昨年度と比べて割合はわずかに減少した。

(小田原市 72.8% 全国 67.9%)

(4) 学校生活等

- 「学校に行くのは楽しいと思っている」生徒の割合については、全国平均並みではあるがさらに高めていきたい項目である。

(小田原市 81.1% 全国 82.1%)

(5) 基本的生活習慣

- 「朝食を毎日食べている」生徒の割合は、昨年度と比べると若干減少し、全国平均より約3ポイント低い。

(小田原市 90.3% 全国 93.5%)

- 「毎日同じくらいの時刻に起きている」生徒の割合昨年度と比べると若干減少し、全国平均より約2ポイント低い。

(小田原市 90.0% 全国 92.1%)

- 1日に2時間以上①「テレビやビデオ・DVD を見たり、聞いたりする」②「携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする」生徒の割合は全国に比べ、7ポイントほど高い。

(①小田原市 62.4% 全国 55.7% ②小田原市 38.2% 全国 31.3%)

(6) 家庭でのコミュニケーション等

- 「家の人（兄弟姉妹除く）と学校での出来事について話をする」生徒の割合は昨年度と比べ増加したが、全国平均と比べると低い。

(小田原市 70.5% 全国 73.7%)

(7) 地域との関わり

- 「今住んでいる地域の行事に参加している」生徒の割合は昨年度より2ポイント増加したが、全国平均より低い。

(小田原市 38.8% 全国 44.8%)

(8) 社会に対する興味・関心

- 「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある」生徒の割合は昨年度より2ポイント増加したが、全国平均より低い。

(小田原市 54.3% 全国 55.9%)

(9) 将来に関する意識

- 「将来の夢や目標を持っている」と回答している生徒の割合は、昨年度と同程度であるが、さらに高めたい項目である。

(小田原市 70.2% 全国 71.7%)

(10) 自尊意識

- 「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」生徒の割合全国平均よりは低いものの、高い数値である。

(小田原市 92.3% 全国 94.2%)

- 「自分にはよいところがあると思う」生徒の割合は全国平均とほぼ同程度である。

(小田原市 68.2% 全国 68.1%)

(11) 規範意識

- 「学校の規則を守っている」とした生徒の割合が全国平均より3ポイント低い。

(小田原市 91.6% 全国 94.4%)

- ①「人の気持ちが分かる人間になりたい」、②「人の役に立つ人間になりたい」と思っている生徒の割合はほぼ全国平均並みであり高い数値である。

(①小田原市 93.5% 全国 94.9% ②小田原市 92.8% 全国 93.7%)

- 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」と回答する生徒の割合は高いが、100%には至っていない。
(小田原市 92.6% 全国 93.7%)

本市の児童生徒の多くは、学校に行くことが好きで、友達に会うことが楽しいと感じている。一方で約 10～20%の児童生徒は、学校に行くことを楽しいとは考えておらず、この項目に関しては、100%を目指していく必要がある。

まず、学習への関心・意欲・態度等については、国語や算数・数学などについてその大切さや将来への有用感を感じている児童生徒の割合は、全国平均並みであるといつてよい。中学校の国語では、昨年度と比べて 2 ポイント増加している。小学校では、授業の中でわからないことがあった時には自分から尋ねに行くことができる児童が多いが、解答を文章で書く問題では、わからないと諦めてしまう傾向も見られる。一方中学校では、国語の授業において、段落や話のまとめりとに内容を理解しながら読んでいることの項目が、昨年度に比べて増加しており、全国平均と比較しても高くなっている。2 年連続で伸びが見られ、各校での学習がさらに充実してきていることがうかがえる。

また、小学校ではほとんどの児童が友だちの話や意見を最後まで聞くことができると答えているが、自分の考えや意見を発表することが得意と感じている児童はその半分にとどまる。中学校でも話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができると感じている生徒は全国平均を上回ってはいるが 7 割弱である。

読書が好きであると答えた小学生の割合は、昨年度よりも 5.1 ポイントも増え、全国平均よりも高くなった。また、1 日あたり 30 分以上読書している児童の割合も昨年度より若干増加した。一方、中学生では昨年同様、全国平均を上回っており、多くの学校で取組まれている「読書タイム」等が読書のきっかけとなっていると思われる。

中学校の理科では、その大切さや将来への有用感を感じている生徒の割合は、ほぼ全国の平均と同じであるが、国語や算数の同質問項目の割合と比べると低くなっている。

次に家庭での学習については、昨年同様、家で学校の宿題をしている小学生は約 96%と多く、全国平均並みであり、家で学校の予習復習をしている児童が 3～4 ポイント、自分で計画を立てて勉強していると答えた児童の割合も、平成 25 年度から 4 ポイント増加した昨年よりも、さらに 2.8 ポイント増え、全国平均に近づいた。1 日 1 時間以上勉強する児童の割合は、昨年度よりは増加したものの、課業日は 4 ポイント、休日は 5 ポイント、全国平均より低くなっている。中学生では、学校の授業以外で 1 日 1 時間以上勉強している生徒の割合は昨年度と比べ大きな変化は見られないが、自分で計画を立てて勉強している生徒の割合は昨年度に比べ、2 ポイント増加した。小学校、中学校とも家庭学習の意識が少しずつ高まってきていることが分かるが、更なる定着を目指した取組みが必要である。

児童生徒の生活習慣に目を向けると、毎日朝食を食べている児童生徒が 90%以上となつてはいるが、中学校では、昨年度より若干割合が低下している。

テレビやゲームに費やす時間については、小学生では、昨年度同様全国平均を上回っている状態が続いているが、ゲームの時間が昨年度より 2 ポイント減少した。また、スマートフォン等による

通話、メール、インターネットについては、昨年度よりは減少したものの、全国平均より小学生では1.2ポイント、中学生で7ポイント高い。これらが、家庭学習の時間を減少させるなど、様々な問題にもつながっていると考えられる。

地域や社会の出来事に対する関心については、小学生では、昨年度より6ポイント伸び、全国平均に並んだ。中学生は昨年度より、2ポイント増加したが、全国に比べて若干低い割合である。さらに、地域の行事に参加する児童生徒の割合は、小学生は約9ポイント、中学生は6ポイント、全国平均を下回っている。小学生、中学生ともスポーツを含めた習い事や学習塾、部活動などが平日の放課後や休日の過ごし方の大部分を占めているという現状を反映している。児童生徒のコミュニティが「地域の仲間」から、自分の所属している「習い事や部活動での仲間」に移行しつつある現在、この傾向は今後も続いていくと思われる。このような中、学習指導要領では地域との連携により「生きる力」を育むことも重要視しており、いかにして地域との連携を取っていくか、その具体策を明確にしていく必要がある。

児童生徒の自尊意識や規範意識については、どの項目もほぼ全国並みであるといえる。ものごとの達成感を味わったことのある児童生徒の割合は90%以上である。それが「自分には、よいところがあると思う」といった自尊感情になると、肯定的な回答をする児童・生徒の割合が70%に下がる。思春期特有の傾向であるとも考えられるが、それでも成し遂げたことへの自信をもっと自尊感情につなげたい。学校や地域、家庭が協力して、成し遂げたことやその経過にも目を向け、それに対する評価を様々な形で行っていき、児童生徒の自尊感情や自己有用感をさらに高めていく必要がある。いじめに関する意識は9割以上の児童生徒が高い意識を持つようになっており、日頃の取組の成果が表れていると考えられるが、引き続き、100%を目指していく必要がある。

今回の調査では、小田原の児童生徒は、質問紙調査からは、全体的にどの項目も全国から大きく離れているものではなく、ほぼ平均並みと考えられる。しかしながら、昨年度に引き続き、地域行事への参加率や家庭学習の時間などに課題がみられた。



5 学校質問紙調査について

○…概ね良好な傾向が見られる項目 ■…課題の見られる項目

※全国・市の数値は、「そのとおりだと思う」「どちらかといえばそう思う」など、肯定的な回答の割合の合計

(1) 学習態度

○ 児童生徒は「熱意をもって勉強している」と回答している中学校の割合が高い。

(小学校：小田原市 88.0% 全国 92.6%)

(中学校：小田原市 100% 全国 89.2%)

○ 生徒は「授業中の私語がなく落ち着いている」と回答している学校の割合が全国に比べて高い。

(中学校：小田原市 100% 全国 93.3%)

(2) 指導方法・学習規律

- 児童生徒に対して、「前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をした」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。
(小学校：小田原市 100% 全国 94.3%)
(中学校：小田原市 100% 全国 92.1%)
- 生徒に対して、「前年度までに、学級全体で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与えた」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。
(中学校：小田原市 63.6% 全国 82.7%)
- 児童に対して、「前年度までに、学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持を徹底した」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。
(小学校：小田原市 100% 全国 96.2%)

(3) 学力向上に向けた取組

- 児童に対して、「前年度に、『朝の読書』などの一斉読書の時間を週 1 回以上設けた」と回答している学校の割合は 100%である。
(小学校：小田原市 100% 全国 91.1%)
- 生徒に対して、「前年度に、『朝の読書』などの一斉読書の時間を基本的に毎日行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。
(中学校：小田原市 90.9% 全国 64.9%)
- 児童に対して、「前年度に、学校図書館を活用した授業を月に数回程度以上行った」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。
(小学校：小田原市 8.0% 全国 47.6%)
- 児童・生徒に対して、「前年度に、放課後を利用した補充的な学習サポートを週に 1 回以上実施した」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。
(小学校：小田原市 4.0% 全国 30.5%)
(中学校：小田原市 0% 全国 23.5%)

(4) 国語科の指導方法

- 児童に対する国語の指導として「前年度までに、補充的な学習の指導を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。
(小学校：小田原市 60.0% 全国 73.8%)
- 生徒に対する国語の指導として「前年度までに、補充的な学習の指導を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。
(中学校：小田原市 90.9% 全国 78.2%)
- 児童に対する国語の指導として、「前年度までに、書く習慣を付ける授業を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。
(小学校：小田原市 80.0% 全国 91.9%)
- 児童に対する国語の指導として、「前年度までに、様々な文章を読む習慣を付ける授業を

行った」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。

(小学校：小田原市 64.0% 全国 84.6%)

- 生徒に対する国語の指導として、「前年度までに、様々な文章を読む習慣を付ける授業を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。

(中学校：小田原市 100% 全国 86.7%)

(5) 算数・数学科の指導方法

- 児童に対する算数の指導として、「前年度までに、実生活における事象との関連を図った授業を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 80.0% 全国 69.3%)

- 生徒に対する数学の指導として、「前年度までに、補充的な学習の指導を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。

(中学校：小田原市 100% 全国 89.1%)

- 児童に対する算数の指導として、「前年度までに、発展的な学習の指導を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。

(小学校：小田原市 52.0% 全国 61.6%)

- 児童に対する算数の指導として、「前年度までに、計算問題などの反復練習をする授業を行った」と回答している学校の割合が高い。

(小学校：小田原市 100% 全国 97.4%)

(6) 理科の指導方法

- 児童に対する理科の指導として「前年度までに、補充的な学習の指導を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。

(中学校：小田原市 32.0% 全国 55.8%)

- 生徒に対する理科の指導として「前年度までに、発展的な学習の指導を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。

(中学校：小田原市 45.5% 全国 62.5%)

- 児童生徒に対する理科の指導として「前年度までに、自ら考えた仮説をもとに観察、実験の計画を立てさせる指導を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 96.0% 全国 81.6%)

(中学校：小田原市 81.8% 全国 65.8%)

(7) 言語活動

- 児童は、「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていると思う」と回答している学校の割合が全国と比べると高い。

(小学校：小田原市 80.0% 全国 71.9%)

- 児童は、「学級やグループでの話し合いなどの活動で、相手の考えを最後まで聞くことができていると思う」と回答している学校の割合が全国と比べると高い。

(小学校：小田原市 96.0% 全国 84.0%)

- 生徒は、「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていると思う」と回答している学校の割合が全国と比べると低い。

(中学校：小田原市 63.6% 全国 69.3%)

- 児童生徒に対して、「前年度までに、学級やグループで話し合う活動を授業などで行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 100% 全国 95.5%)

(中学校：小田原市 100% 全国 89.2%)

- 各教科のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けている学校の割合が中学校は、全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 92.0% 全国 91.7%)

(中学校：小田原市 100% 全国 86.7%)

- 言語活動に重点をおいた指導計画を作成している学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 92.0% 全国 88.9%)

(中学校：小田原市 90.9% 全国 82.1%)

- 学校全体の言語活動の実施状況や課題について、全職員の間で話し合ったり、検討したりしている学校の割合が全国と同程度である。

(小学校：小田原市 84.0% 全国 88.6%)

(中学校：小田原市 81.9% 全国 77.6%)

(8) 個に応じた指導

- 児童生徒に対して、「算数・数学の授業において、前年度に、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を年間の授業のうち 1/2 以上行い、習得できるようにした」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。

(小学校：小田原市 4.0% 全国 32.4%)

(中学校：小田原市 9.1% 全国 25.3%)

- 児童生徒に対して、「算数・数学の授業において、前年度に、ティームティーチングによる指導を年間の授業のうち 1/2 以上行なった」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 44.0% 全国 32.9%)

(中学校：小田原市 54.6% 全国 33.0%)

(9) コンピュータなどを活用した教育

- 児童生徒に対して、「前年度までに、コンピュータ等の情報通信技術（パソコン【タブレット端末含む】、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用して、子供同士が教え合い学び合う学習（協働学習）や課題発見、解決型の学習指導を行なった」と回答している学校の割合は中学校において全国と比べて低い。

(小学校：小田原市 68.0% 全国 66.1%)

(中学校：小田原市 36.4% 全国 53.3%)

(10) 家庭学習

- 生徒に対して、「前年度までに、保護者に対して生徒の家庭学習を促すような働きかけを行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。
(中学校：小田原市 100% 全国 83.9%)
- 児童に対して、「前年度までに、国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」と回答している学校の割合が高い。
(小学校：小田原市 100% 全国 99.6%)
- 生徒に対して、「前年度までに、国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」と回答している学校の割合が全国と比べて低い。
(中学校：小田原市 72.8% 全国 91.1%)
- 児童に対して、「前年度までに、算数の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」と回答している学校の割合が高い。
(小学校：小田原市 100% 全国 99.6%)
- 生徒に対して、「前年度までに、数学の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。
(中学校：小田原市 100% 全国 93.3%)
- 児童に対して、「前年度までに、理科の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた」と回答している学校の割合が低い。
(小学校：小田原市 24.0% 全国 40.0%)
- 生徒に対して、「前年度までに、理科の指導として、長期休業期間中に自由研究や課題研究などの家庭学習の課題を与えた」と回答している学校の割合が高い。
(中学校：小田原市 100% 全国 81.2%)

(11) 教員研修

- 学校でテーマを決め、講師を招聘する等の校内研修を行っている学校の割合が全国と比べて高い。
(小学校：小田原市 100% 全国 93.3%)
(中学校：小田原市 100% 全国 85.8%)
- 授業研究を伴う校内研修を前年度に 15 回以上実施した学校の割合が全国と比べて高い。
(小学校：小田原市 40.0% 全国 24.4%)
(中学校：小田原市 63.6% 全国 13.3%)

(12) 教職員の取り組み

- 教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させている学校の割合が高い。
(小学校：小田原市 100% 全国 95.8%)
(中学校：小田原市 90.9% 全国 92.3%)
- 学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として積極的に取り組んでいる学校

の割合が高い。

(中学校：小田原市 100% 全国 96.1%)

(13) 特別支援教育

- 学校の教員は、特別支援教育について理解し、前年度までに、児童に対する授業の中で、児童の特性に応じた指導上の工夫（板書や説明の仕方、教材の工夫など）を行った学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 96.0% 全国 89.2%)

(14) 学校種間の連携

- 教科の指導内容や指導方法について近隣の小中学校と連携（教師の合同研修、教師の交流、教育課程の接続など）を行っている学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 92.0% 全国 66.7%)

(中学校：小田原市 90.9% 全国 75.5%)

(15) 地域の人材・施設の活用

- 児童・生徒に対して、「前年度までに、ボランティア等による授業サポート（補助）を行った」と回答している学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 92.0% 全国 40.6%)

(中学校：小田原市 72.8% 全国 24.2%)

- 学校支援地域本部などの学校支援ボランティアの仕組みにより、保護者や地域の人が学校における教育活動や様々な活動に参加している学校の割合が全国と比べて高い。

(小学校：小田原市 96.0% 全国 84.1%)

(中学校：小田原市 100% 全国 69.7%)

- 児童に対して、「前年度までに博物館や科学館、図書館を利用した授業を行った」と回答している学校が全国の割合と比べて低い。

(小学校：小田原市 16.0% 全国 36.4%)

(16) 全国学力・学習状況調査等の活用

- 平成 26 年度全国学力・学習状況調査の自校の結果を分析し、学校全体で成果や課題を共有した学校の割合が全国と比べて低い。

(小学校：小田原市 92.0% 全国 98.1%)

(中学校：小田原市 72.7% 全国 96.9%)

- 平成 26 年度全国学力・学習状況調査の結果を地方公共団体における独自の学力調査の結果と併せて分析し、具体的な教育指導の改善や指導計画等への反映を行った学校の割合が全国と比べて低い。

(小学校：小田原市 48.0% 全国 91.9%)

(中学校：小田原市 63.6% 全国 87.9%)

- 平成 26 年度全国学力・学習状況調査の自校の結果を、調査対象学年・教科だけでなく、

学校全体で教育活動を改善するために活用した学校の割合が全国と比べて低い。

(小学校：小田原市 84.0% 全国 95.8%)

(中学校：小田原市 54.5% 全国 93.2%)

児童生徒の学習態度については、中学校では「熱意をもって勉強している」「授業中の私語がなくて落ち着いている」と回答している学校、小学校では「学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持を徹底した」と回答した学校が多く、全国を上回っている。小・中学校ともに学習規律の徹底を図る指導が行われ、児童生徒が落ち着いて学習に取り組むことができる要因となっている。また、学校生活の中で一人一人のよい点を見つけ、積極的に評価する指導がされており、児童生徒が意欲をもって学習することにつながっている。

学力向上に向けた取り組みについては、小学校において「『朝の読書』などの一斉読書の時間を週に複数回定期的に行った」と回答した学校は昨年よりも増えたが、全国と比べて大きく下回っている状況は変わらない。

学校司書が全小中学校に配置され、児童生徒が本に親しむための環境整備や、授業で活用する図書の準備等に努めている。しかし、小・中学校ともに学校図書館を活用した授業があまり行われていないので、学校司書と連携し、授業の中で計画的に学校図書館を活用していくことが望まれる。

言語活動については、小学校では「学級やグループでの話し合い活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができています」「学級やグループでの話し合いなどの活動で、相手の考えを最後まで聞くことができています」と回答した学校の割合が高い。しかし、中学校ではその割合が低くなっている。中学校でも、相手の考えをしっかりと聞き、自分の考えを再構成し、表現していくというような学習の過程を授業の中で大切にしていきたい。小学校では「学校全体の言語活動の実施状況や課題について、全教職員の間で話し合ったり、検討したりしている」学校の割合が低かった。言語活動を通して、児童につけたい力がついているのかどうか等を振り返り、指導計画を改善していく必要がある。

コンピュータなどを活用した教育については、「コンピュータ等の情報通信技術を活用して、子供同士が教え合い学び合う学習（協働学習）や課題発見・解決型の学習指導を行った」と回答した小学校は昨年より増えたが、中学校は全国より低かった。特に中学校を中心に、視聴覚機器を効果的に活用した授業等を推進していきたい。

地域の人材・施設の活用については、全国と比べて高い結果が出ている。これは、本市の教育施策のひとつである学校支援地域本部事業の中で、保護者や地域の方によるスクールボランティアの活動が活発に行われている成果であると捉えられる。

全国学力・学習状況調査の活用については、「平成 26 年度全国学力・学習状況調査の自校の結果を分析し、学校全体で成果や課題を共有した」「自校の分析結果について、調査対象学年・教科だけでなく、学校全体で教育活動を改善するために活用した」割合が、全国を下回っている。自校の結果を分析し、児童生徒の実態を客観的に把握した上で、「授業アイデア集」等を活用しながら、学校全体で授業改善を積極的に進めていくことが望まれる。





6 まとめ

教科に関する調査、児童生徒質問紙調査、学校質問紙調査の結果から、各学校や教育委員会において、次の点に取り組むことが大切であると考えられる。

(1) 学校において

文部科学省では、全国平均正答率±5%以内は「全国同程度」であるとしており、小田原市では小・中学校とも全ての教科において全国平均を下回っているが、-5%を下回っているものはなく、「全国同程度」と判断できる。本調査の結果は、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面ではあるが、校内研究や教科指導に関する研修の成果を表す客観的な指標のひとつであるとも捉えられることから、全ての教科において全国平均を目標にして児童生徒の学力向上を図っていききたい。

国語では、小・中学校に共通して言語事項に課題が見られた。意図的に漢字を読んだり書いたりする機会を設けたり、場面に即した「語句」「語い」の使い方について指導したりする工夫が必要である。漢字や語句を日常的に使うような学習を国語以外でも行ったり、読書指導と関連させたりするなど、継続的な指導が必要であると考ええる。また、昨年度に引き続き、「書く」領域についても課題が見られた。何について書くのかを明確にしたり、または自分はどのように考えているのかについて根拠を示しながら書いたり話し合ったりする活動を、日常的に行う必要がある。国語は、全ての学習の基本でもあるため、国語で学んだことを他教科で生かすことを意識した指導をしていくことも重要である。

算数・数学においては、小学校では「図形」の領域に、そして中学校では「資料の活用」に課題が見られた。既習事項を生かして考え、考えたことを論理的に話したり聞き手に的確に伝えたり、与えられた情報から必要な情報を選択したりする力を育てるためには、児童生徒が目的意識をもって主体的に取り組むことのできる学習の展開を工夫することが大切である。さらに、実生活と結びつけるなど、算数・数学が生活の役に立っているということを実感できるようにする工夫も必要である。また、無解答率も依然高く、その原因を全体的な傾向として捉えるだけでなく、児童生徒一人一人のつまづきをみとり、丁寧に指導していく必要がある。

理科においては、平成24年度以来2度目の実施であるが、今回は抽出調査であったため、全児童生徒対象の調査としては初の実施であった。小・中学校ともに平均正答率で全国平均と比較し、2～3ポイント低い結果であり、共通して言えることは、化学領域に課題が見られることである。化学領域の学習では、身の回りの物質、化学変化などの化学的な事物・現象に関して内容の系統性を図り、目に見える物質の性質や反応を目に見えない原子、分子、イオンなどの粒子の概念を用いて統一的に考察し、科学的に探求する能力を育成しなければならない。そのためには、小学校段階より見通しをもって観察、実験が行えるよう指導することが大事であり、予想と結果を基にした考察活動などを積み上げながら、実感を伴った理解を図ることが大切である。

質問紙調査のまとめからもわかるとおり、本市の児童生徒の学習への関心・意欲については概ね全国平均であり、昨年度と比較しても、学習の有用性を実感したり主体的に学習に取り組もうとしたりしている児童生徒の割合は増加している。また、全国と比較して校内研修も充実しており、各校で授業改善に積極的に取り組んでいる。昨年度まで課題とされていた「児童生徒が学習したことを理解したという実感や充実感を持てる授業づくり」「児童生徒が学習のしかたに見通

しを持てる授業づくり」「児童生徒が友達と考えることを楽しむ雰囲気がある授業づくり」という点では各校で改善の兆候が見られ、児童生徒の学習意欲の向上については一定の成果が出ていると考える。一方で、解答を文章で書く際、解答を諦めたり途中で書くのをやめたりしたという割合が高く、この点が無解答率の高さにつながっており、依然課題のままである。「正解かどうかだけではなく思考の過程を大切にする授業」や小田原市のよさである友達同士で関わり合いながら学ぶことを大切にしつつ、「グループ等で学んだことが確実に個に還ることを意識した授業づくり」を、教師が意識していく必要がある。

(2) 教育委員会において

① 授業の充実・指導の改善

児童生徒一人一人の確かな学力の向上、教職員の指導力の向上に向けては、本調査結果の適切な活用が必要であると考えている。しかしながら、調査の本来のねらいや、学習指導要領の趣旨をふまえた調査であることについて、教職員一人一人が十分に理解しているとは言い難い状況は継続しており、調査結果そのものについてもあまり活用されていない実態がある。今年度は、小田原市教育研究所において、平成 26 年度から 2 年間の計画で行ってきた「全国学力・学習状況調査の活用に関する研究」のまとめの年である。2 月には公開研究会を開催するので、研究の成果を市内小・中学校に広げ、活用につなげたい。

また、教職員の指導力の向上に向けては、国立教育政策研究所の教科調査官経験者や大学教授を講師として招請して「学習指導法研修会」を開催し、実践的な研修を行っている。併せて、各校の校内研究において、学習指導要領の趣旨を生かした授業の実際について、教育指導課の指導主事が指導・助言を行っている。経験年数の少ない教職員が増えている学校において、教職員が互いに学び合う校内研究は、指導力向上に直結する大切な場であるので、より具体的で有効な指導・助言を行い、一層の充実が図れるよう努めたい。

② 保護者・地域との連携

地域と連携しながら子どもたちの「確かな学力」を育むためには、まず『小田原市学校教育振興基本計画』の共通理解を図ることが大切である。その基本理念のもと、「基本的な生活習慣や規範意識の確立を図る」ことなどの『おだわらっ子の約束』の定着や、スクール・ボランティアの一層の推進といった、幼保・小・中一体教育、地域一体教育を一層推進していかなければならない。

